

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 100 号

平成 22 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

相沢良一

「黒潮の神学」(黒潮社)より(3)

説教の課題

説教の中心は申すまでもなく「主なるキリスト・イエスを宣べ伝える」(第2コリント4の5)ことであって、自分の体験や思想を語るのではありません。しかもそのさい「すぐれた言葉や智恵を用いず」十字架につけられたキリストを「霊と力」によって、証明することにあります。(第1コリントの1-5参照)

使徒パウロは第1テサロニケ1の5において「私たちの福音があなたがたに伝えられた時、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからである」と申しておりますが、十字架の主キリストを宣べ伝えるのに必要なのは、言葉(知識)だけでなく、力と聖霊と強い確信とであります。...

神はイエス・キリストの出来事において、この私の罪を許し、この私を信任しておってください。だから自分自身に失望しないで、臆することなく、十字架の主イエス・キリストを宣べ伝えることが出来るのです。そこで、説教者に要求されることは、「真心をこめて、神につかわされた者として、神のみまえて、キリストにあって語る」(第2コリント2・17)という態度ではないでしょうか、聖書を語ると

いうことは、主イエス・キリストを語ることであります。説教とは、主イエス・キリストを語る以外のなにものでもないことを、私は確信をいたしておるのであります。...

ときどき、他の教会よりお招きを受けて説教するのは、伝道礼拝とでも申すべき内容の集まりでありますので、たぶんに興梠先生の申されたような傾向の(注 人間的実例や証の要素が多い)説教になりがちであります。白川先生がよくいわれるのですが、他教会の先生の話しは御馳走で、食べすぎれば食傷します。やはり麦飯とタクワンで、自分の教会では「信仰の修練」という面で、地味な聖書の講解が主になります。私自身この点で、松本先生の講解説教に学ぶところ多大であります。

説教を礼拝説教と伝道説教とに分けてよいものかどうか、私にはよく分かりませんが、いずれの場合にも、「巧みな智恵の言葉」、即ち智者学者の如くに語らないで、福音の真理を平易に、誰にも分かるように語らなければならぬと私は確信しておるのです、誰が何と言ったとか、どの本には何と書いてあるのか、というのではなく、聖書はかく語ると力強く訴え得る説教がいちばん良い説教ではないでしょうか。

未だ信じていない人たちは、主キリストをわが救い主と受け入れ、信徒はますます霊性が恵まれ、信仰のおわりを全う出来るように養われる、この事はただ「神の言^{ことば}」によって起こる出来事ですから、

この神の言^{ことば} 聖書を忠実に力強く説き明かすことの出来る者にせられたいと、常日頃から願っております。 (62.2)

説教と聖書

説教に二種類あると普通いわれます。第1は講解説教で聖書の本文にそって説教しながらメッセージを伝えるもの、第2は主題説教で、一つの題目を中心にして、それに合う聖書の箇所をいくつか選んで語るものです。従って聖書の取扱いの差があるとはいえ、聖書によって説教が成立することに変わりはありません。ただ、より直接に聖書に聞こうとするのは、第1の講解説教であり、日本の教会においては、大部分この形だと申してよいでしょう。...

説教のメッセージというのは、その神の語りかけて下さる言葉であるわけで、それをとらえるために牧師、伝道者は骨身を削ると申してよいのです。...

ここに牧師、伝道者各自の聖書研究の深さということが大きな問題となってきます。絶えず聖書を真実に学ぶことなしに、説教ができるわけはありません。聖書講義はもちろんですが、説教はさらにそこから進んで、現実に対する神よりのメッセージをとらえ、伝えねばならないのですから、なおさらです。聖書を生きた神の言葉として絶えず味わっていなければ、どうしてそういうことが出来ましょう。...

大胆に言えば、私共の聖書研究はあまりに足りないと思います。その証拠は説教の貧困となって現れます。今日の教会の最大の問題は、何と言っても説教だと考えられます。...

しかしどんな状態のなかでも最善を尽くして、誠実に働き貫くことこそ、真に尊敬すべきことではないでしょうか。どうも大事なことが抜けてしまい、聖書の教えを離れて、世の中の人と同じことを考え、行っているのでは、神の教会ではなくなり、キリストの子らではなくなります。説教が正しく聖書に立つことを中心として、真実の教会を打建てたいものであります。(62.9)

夢と眠り

夢の原因は単に五臓六腑の疲れだけではなく、フロイトによれば願望が夢の原因だとある。もっともいくら願いごとがかなえられても夢の中ではどうしようもない。...

詩篇第4編は、眠りに就いてのじつに美しい詩である。夕べ床に伏すとき、この詩人は「あなたがわたしの心にお与えになった喜びは、穀物とぶどう酒の豊かな時にまさるものでした。わたしは安らかに伏し、また眠ります。主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのは、ただあなただけです」(7-8節)とうたった。神はその愛する者に、眠りを与えてくださるのである。

使徒行伝第7章にステパノ殉教物語が記されている。彼は神を瀆したというカドで、狂熱的なユダヤ人たちから石で打ち殺された。

その時、ステパノは祈りつづけ「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください」と言って、息を引き取った。

しかし、使徒行伝の記者は、息を引き取ったとは書かないで「彼は眠りについた」(7章60節)と叙述した。ステパノの最期がどんなに美しかったかがわかる。

そう言えば、主イエスが十字架上で最後に叫ばれた「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ福音書23の46)というおことばは、当時、イスラエルの子供たちが夜寝る前に「おとうさま、お休みなさい」と父親にした挨拶と同じだと、バークレーという聖書学者が書いていた。

われわれも人生さいごの眠りに就く時がくる。熟睡した朝はさわやかだ。神さまに凡てをおまかせして、目を閉じることができるなら、さわやかな復活の朝が、われわれの目の覚めるのを待っているではないか。

(71.1)

時と災難はすべての人に臨む

さる1月12日の夜、隣村の集會に赴く途中、暗い夜道を走ったため、あやまって溝に足を取られ、ものの見事に横転した。その時はひどい捻挫と打撲とばかり思い込み、それ以来20日あまりも足を引きずり歩きまわり、その間2度も飛行機で上京した。しかし、いつになっても足に力が入らない。2月にはいって、やっとアキレス腱が切れているのではないかとということで、熱海にある国立病院の整形外科で診てもらふことにした。その翌日はまた大島に帰ってすぐ新島の教會に出かける予定をしていた。ところが診察の結果、即刻入院手術ということになり、少なくとも1カ月は入院していなければならないと宣告され、いまさらのごとくこれはたいへんなことになったと思った。... しかし入院となった以上は覚悟を決めて、留守宅にあのこと、このことを何回も電話で指示し、手術の前日、島の教會のみなさんには数十通のハガキを書いた。たかがアキレス腱ぐらいと思ったが、さすがにその晩は痛かったのと、もものつけ根から巻かれたギブスの重さで一睡も出来なかった。...

手術の翌日、隣のベッドに熱海の在のKさんという人がはいつてきた。60代の方だが足の運びが思わしくないための検査であった。この病院に入る前にも、セキズイから水を取られ、その時は半月ほど頭をあげておれなかった。また同じ辛い思いをするのかと思うと、イヤだイヤだと繰り返していた。聖書に「主の御名を呼び求める者は、すべて救わるべし」(ロマ書10の13)とあるから、苦しい時は、「イエスさま、助けてください」とお祈りをしてみなさいと、勧めたら、そのとおりに祈りはじめた。そのうち留守宅から旧新約聖書が届いたので、はじめ病院に持参した小型の新約聖書を差しあげた。... 数日してから、毎朝Kさんと一緒に祈ることにした。こちらはギブスを巻いているので、足を投げだしたままだったが、Kさんはベッドの上にきちんとひざまずいていた。こちららが退院する時には、Kさんは2回新約聖書を通読されていた。

わが涙よわが歌となれ

新教出版社から、原崎百子さんの『わが涙よわが歌となれ』が出版された。この本のことは各方面で紹介され、多大の反響をまきおこし、すでに6,7万冊以上が出版されているはずである。...

6月28日(1979年)から死の前日にわたる病床日記は、信仰と愛と希望とに生かされた珠玉の言葉で綴られ、これを読むものは、海鳴りにも似た感激の怒涛に巻き込まれる。7月30日(主の日)に、「わが礼拝」と題する詩がある。...

わがうめきよ
我が賛美の歌となれ
我が苦しい息よ
我が信仰の告白となれ
わが涙よわが歌となれ
主をほめまつるわが歌となれ
わが肉体から発するすべての吐息よ
呼吸困難よ 咳よ
主を讃美せよ
わが熱よ 汗よ わが息よ
最後まで主をほめたたえてあれ

原崎百子さんの44年の生涯は、この44日間に凝縮されたのである。さらには、この44日間は、この7月30日の「わが礼拝」と題するこの一篇の詩に凝縮されたのである。

百子さんは安らかに息を引き取ったのではなかった。原崎牧師によれば、最後の2時間は言葉に絶する苦しみの2時間であった。まさに、勇士は戦いに倒れたのであった。原崎百子さんの『わが涙よわが歌になれ』が世に出たことによって、われわれは、どんなに励まされ、力づけられ、奮い立たしめられたことであろうか。

聖書食物考

マタイ福音書第4章は「荒野の試み」である。

「さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして40日40夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った。『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい』。イエスは答えて言われた『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きる者である』と書いてある。」(1-4節)このカッコの中の言葉は、旧約聖書申命記第8章1節より3節までの引用である。...

さらにマタイ福音書第14章には、主イエスが5つのパンと2匹の魚で、五千人の空腹を満たされた奇跡物語が記されている。この物語は、マタイ福音書のほか、マルコ、ルカ、ヨハネ福音書に共通に記録されており、ヨハネ福音書第6章では、この5つのパンと二匹の魚は、子供が差し出したものであった。...ヨハネ福音書第6章によると、このあと「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい」(27節)「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決してかわくことがない」(35節)との主イエスのことばが続く。...

さいごにヨハネ黙示録にうつる。第3章20節には次のように記されている。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」...このヨハネ黙示録は22章でおわるが、その第1節に次のような象徴的な描写がなされている。「御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は神と子羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、12種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。」

我にとりて生きるはキリストなり

...このようにかつての淵田海軍大佐(注 かつての真珠湾攻撃隊長淵田美津雄大佐)を改心させ、好地由太郎(注 殺人により無期懲役囚)を聖徒につくりかえ、星野富弘さんに生きる力を与えた聖書とは、いったいいかなる書物であるのでしょうか。聖書は主イエス・キリストの十字架の出来事と、その意味について記された書物なのであります。

「われにとりて生きるはキリストなり」とは、主イエスとほぼ同時代を生きた使徒パウロの言葉であります。若き日の彼は、キリスト教の迫害者でした。彼はイエスを神から呪われたため恥ずべき十字架の刑に処せられた犯罪人と考え、そのような人物をメシヤ(救い主)と説くイエスの弟子たちに対して、我慢ができなかったのです。その彼が急転直下、180度の転換をとげ、迫害者からキリストの使徒に変えられ、爾来30年にわたって、彼はこのキリストの福音を小アジアからマケドニアに、さらにギリシャに、さらには 로마にまで宣べ伝え、ついに紀元60年代ネロ皇帝の時、彼は殉教の死を遂げたのです。

のちになって、彼は自分の回心の経験を「神がみ子をわが内に啓示してくださった」(ガラテヤ書1章16節)とこのように述べております。彼が南船北馬席温まる暇もない文字通り硝煙弾雨の中で、諸教会に書き送った9通の手紙が新約聖書におさめられております。

その手紙の中でパウロは「十字架の言は滅びゆく者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」(第1コリント1章18節)と叫びました。十字架の言は福音です。福音は主イエス・キリストご自身です。...その十字架にこめられて入る深い意味の分かった者にとっては、私たちを生かす神の力である。これが使徒パウロの宣教の使信であったのです。聖書の救いとは、単なる病気とか、貧乏とか、不幸からの救いではなく、実に罪からの救いであり
ます。...

(84.8)

人間とは考える足である

...聖書には、足に関する言葉がたくさん出てくる。...

使徒パウロは、「しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。『ああ、美しいかな、よきおとずれを告げる者の足は』と書いてあるとおりである」(ロマ書 10 章 14 - 15 節)と述べた。この括弧の中のことばは、このパウロの時代より 600 年も昔に記された旧約のイザヤ書(第 52 章 7 節)よりの引用である。...

さらに、ヘブル人への手紙には、「肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。すべての訓練は、当座は喜ばしいものと思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になればそれによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。

それだから、あなたがたのなえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐにしなさい。また、足のなえているものが踏みはずすことなく、むしろいやされるように、あなた方の足のために、まっすぐな道を作りなさい」(ヘブル書第 12 章 1 - 13 節)と、このように記されている。

この「ヘブル人への手紙」というのは、紀元 1 世紀の終わりごろ認められたもので、著者は不明であるが、新約聖書に独特の価値を与えた文書である。

老化は足から来ると言われる。われわれは老化を防ぐために、平素から足腰を鍛えなければならない。それにもまして、日々みことばと祈りによって、信仰の足腰を鍛えなければならないのである。

「足」について、いろいろ考えているうちに「人間は考える足だ」と思いあたった次第である。 (85・8)

続 鉄道唱歌についてほろり

この3月、1カ月かかって、ついに「鉄道唱歌」66節を全部暗じてうたうことができるようになった。1日に2節ずつと正確におぼえていった涙ぐましい(?)努力が、実を結んだわけである。...「鉄道唱歌」をおぼえたついでに、この曲に合わせて、旧新約聖書66巻を歌えるようにして見たいと思い立ちました。「鉄道唱歌」を口ずさみながら、筆を走らせてゆくうちに、一晩でいつの間にか旧約聖書39節、新約聖書27節は2日間で出来上がりました。いささか拙速のきらいなきにしも非ずでしたが、その後かなり推敲いたしました。

(以下「聖書唱歌(新約篇)」から、抜粋して、掲げます。)

聖書唱歌(新約篇)

作詞相沢良一

(40)

新約聖書は福音書

歴史と手紙と黙示録

キリスト・イエスの証の書

旧約預言の成就の書

(41)

ガリラヤの里 風薫り

丘は若草燃えにけり

マタイ5・6・7章は

主イエスの教えと知られたり

(42)

わが神わが神なにゆえに

われを見捨てたまひしや

マルコの描くは十字架の

道を目ざせし救い主

(43)

ルカの筆なる美しき

エマオ途上のキリストぞ

主はわがいのちわが望み

エマオの途はわが途ぞ

(44)

ことばの受肉ぞみ子イエス

光はやみに輝けり

ヨハネの3の16は

小聖書ともよばれたり

(45)

使徒行伝は教会の

誕生記す歴史の書

その9章は迫害者

のちのパウロの回心記

(46)

宣ぶるはこれぞ十字架の主
南船北馬あたたまる
席なき旅に数々の
手紙をパウロは残したり

(47)

神もし我らの味方なら
誰かわれらに敵せんや
名高きロマ書は 16 章
その 8 章こそ高き嶺

(48)

キリストの死とよみがえり
又その啓示に及びたる
コリント前書の 15 章
パウロの筆の力なれ

(52)

キリスト・イエスを知ることの
知識の価値の絶大を
うたいあげたるピリピ書は
獄中書簡の一つなれ

(65)

ユダ書に続くは最後の書
これぞヨハネの黙示録
遠き未来のことならず
望みを与うるいまの書ぞ

(66)

新約聖書は 27
ここには神の啓示あり
ここにはいのち 光あり
キリスト・イエスの救いあり

聖書唱歌（新約篇）（2）

新約聖書の配列では、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネとなっておりますが、一番早く書かれたのは紀元70年代のマルコ福音書でした。このマルコ福音書を底本として、10年後に、アンテオケアで編纂されたのがマタイ福音書であり、ほぼ同じころ、ギリシャ人ルカによって編纂されたのが、ルカ福音書であります。

このマタイ、マルコ、ルカ福音書は共観福音書とよばれておりますが、ヨハネ福音書はその成立がさらにおくれ、紀元1世紀のおわりごろと推定されております。その対象はヘレニズムの文化世界で、思弁的傾向が強く、第四福音書とも称されております。

使徒行伝の著者は、ルカ福音書と同じルカであります。使徒行伝の後半は、使徒パウロの伝道旅行記で、ルカはパウロと行を共にしたのではないとも言われております。

パウロの手紙は、教会に宛てられたものは、ロマ、コリント前後書、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ、テサロニケ前後書の9通で、そのうちのエペソ、ピリピ、コロサイの3教会宛てのものと、私信のピレモン書は、従来はロマの獄中にて記されたものとされ、「獄中書簡」とよばれています。...

新約聖書が成立したのは、第2世紀のおわりごろで、それが正典とされ、ロマ帝国内の各教会の使用にたえ得るようになったのは、第5世紀のころと見られています。

いま、私たちは「旧新約聖書は、神の靈感によりて成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の正典なり。されば聖書は聖霊によりて、神につき、救いにつきて、全き知識を我らに与ふる神のことばにして、信仰と生活との誤りなき規範なり」（日本基督教団信仰告白）と、このように告白をいたしております。

わが「聖書唱歌」も、多少は文献学的立場に立ちながらも、このような聖書の正典性に対する信仰告白に基づいておるものであります。

（89.7）

「聖書唱歌」補遺

既に新約篇はできあがっているのに、5月の中旬に原稿を出せば、何とか6月6日に「聖書唱歌」が文庫版サイズで刊行できる。なぜ6月6日に固執したかという、例の「鉄道唱歌」も66節なら「聖書唱歌」も66節からなる。6月6日は本年はこの日をおいて2度とは来ない。わが「聖書唱歌」を文庫本サイズで刊行することが先決だと、(89年)6月6日に間に合うように手筈を整えた。

(6月7日からの)北海道の巡回先では、みなさんがこの「鉄道唱歌」を喜んでうたって下さった。三浦(綾子・光世)先生ご夫妻とは6年ぶりの再開で話は尽きず、特急が旭川のプラット・フォームを離れるまでつづいた。大島に帰ってから、昼夜兼行、ほぼ1週間のうちに3万冊の発送を終えた。

この「聖書唱歌」を全部うたい終わるまでには30分はかかる。正確には28分である。根気よく毎日口ずさんで頂くならば、聖書の内容が心のうちに彫みこまれ、みことばによる慰めと喜びと力とが油然而として湧きあがり、毎日が楽しくなるはずである。こういうのを自画自讃と称すべきかもしれない。例の「鉄道唱歌」が出来てから90年を経過したが、今でも歌い継がれているのである。わが「聖書唱歌」も、100年ののちに期待を抱かしめられている次第である。

(89.7)